

第8回 布育(ぬのいく)のすすめ②～心を育む～ 簡単布おもちゃ作り「動物パペット」



講師 さとう ゆきこ 氏

はじめに

布おもちゃ作家「ゆっこせんせい」として静岡市を中心に活動しています。3年程前に布育普及協会を作りました。布のおもちゃを通して、子どもの心身の健やかな成長に寄り添う活動をしています。

1 『ちゃんと遊べば ちゃんと育つ』

『ちゃんと』に正解はありませんが、皆さんは保育に携わる者として、遊びのプロです。子どもは、遊びの中で学んでいきます。一つ一つ教えなくても、遊びを通して身につけていく力はたくさんあります。

遊びを構成する要素として、「人」と「物」があります。「人」には、家族や保育者などの大人や友だちがいます。もう一つは「物」です。「物」には、おもちゃと場所や時間といった環境があります。

今日はおもちゃを作りながら、場所や時間について考えていきます。

2 「動物パペット」(ぶた:子どもサイズ)を作ろう

こぶたのパペット(指人形)を作ります。今回作るのは、子どもの手のサイズです。

【材料】

- ・フリース生地(ピンク) 2枚
- ・ウオッシュャブルフェルト
- 黒(目) 2枚・ピンク・ベージュ(鼻) 各1枚
- ・刺繍糸(ピンク・黒・ベージュ)

【作り方】

- (1) 同サイズのフリース生地を、中表に2枚重ねる。型紙を中央に置いて、チャコペンなどで、型を写す

布と布がずれてしまうと、出来上がりも裾がずれてしまいますので気をつけましょう。

(2) 待ち針を打つ

フリース生地は厚みがあるので、きちんと待ち針を打つことが大切です。縫う線の近くに待ち針を打つのが基本です。待ち針があまりたくさんないという方は、縫いながら待ち針を打ち直します。

(3) 線に沿って、半返し縫いで縫う(ピンク糸・1本どり)

(半返し縫いは、1針毎、しっかり糸を引いて縫うと、仕上がりがきれい)

伸縮性がありふわふわして厚みがある布は、半返し縫いで縫うと細かく縫うことができます。

(4) 周りを5mm位残し、切り落とす カーブや角に切り込みを入れる

布を2枚重ねて縫っているのですが、裏返したときに引きつれてしまいます。角があるところは切り込みを入れることで、引きつれなくなります。

(5) 裏返す

(6) フェルト黒を目の位置に、たてまつりで縫いつける(黒糸・1本どり)

フェルトピンク・ベージュを鼻の形に切り、たてまつりで縫いつける(各色・1本どり)
(本体を2枚重ねて縫ってしまわないように注意!間に紙などを入れて、縫うと良い)

顔のパーツは、一度縫い付ける前に配置してみます。私が普段かわいくするために心がけていることは、おでこを広く取り、目と鼻をキュッと寄せてつけることです。

(7) 耳を折り曲げて、縫いとめる

3 素材について

今回使うフリース生地は、ポリエステルでできていて、洗濯も可能なのでおすすめです。ふわふわしていますが、縫いやすく、出来上がるとモコモコして、ぬいぐるみのような感触になります。ほつれないのも大きな特徴です。切りっぱなしでもボロボロしてこないのが良いところです。

4 アレンジがいろいろできる

ちょっと変えるだけで、うさぎにもなります。ぱんだや、こあらもできます。たてがみを挟むと、らいおんにもなります。資料の後ろについている型紙は、個人や園で活用してくださる分には構わないので、コピーしてアレンジしてみてください。今日の型紙をA3に拡大コピーをすると大人のサイズのパペットができます。

おばけのパペットは、こぶたのパペットより簡単にできます。一度作ることができると、次に作る時に「このくらいだったらできそう」と思えるところが良いのです。

5 パペット（指人形）にできることって？

(1) 人形劇をする

(2) スキンシップ

これから4月になり、新入園児を迎えることと思います。そんなときに知らない大人がグイグイいくよりも、かわいいパペットが来てくれることで安心することもあります。

(3) 代弁 保育者が「～～しよう」と言うと「ヤダ」となる子も、パペットが同じことを誘うとすん

なり聞くということがあります。パペットのぶたさんのお願いなら聞いてくれることもあるので、ぜひ役立ててください。

(4) 第三者

親子等、二人きりでうまくいかないとき、ちょっと雰囲気を変えたいとき等にもう一人の話し相手として活躍することがあります。

パペットは大人がやって見せるものというイメージを子どもはもっています。大人がつけてやってみせると、子どもはそれを見て「自分もやってみたい」となります。しかし、大人サイズのパペットは子どもではうまく動かすことができません。そこで、子どもサイズのパペットなら、子どもも楽しく動かすことができます。

(5) 認知

パペットを「自分の方に向けて付けると相手に見えない」「相手に向けてつけると自分に見えない」。つまり、パペットは「人の見え方と自分の見え方は違うんだ」ということに気づくことのできるおもちゃです。

子どもにとっておもちゃとは、遊びを助けるものであり、遊びは、成長・発達の上で欠かせないものです。おもちゃがあることで、「これは何だろう」「できるかなあ」「やってみたい」と心が動き、体が動いていくことが、自分で育つ力になっていくのです。適切なおもちゃがあることで、豊かな遊びが広がっていきます。その先に健やかな成長や発達があります。

6 布おもちゃが育むもの 『布育』のすすめ

前回は「手指体を育む布おもちゃ」というテーマでお話をしました。今回は「心を育む布おもちゃ」という視点で考えます。布おもちゃは、「情緒の安定」と「ごっこ遊びを助ける」というはたらきがあります。

情緒の安定、癒しとは、つまり子どもの機嫌のよ

いときのことです。1歳くらいまでの子どもは、自分の体調や感情を言葉で説明することが難しいです。もう少し大きくなっても、いざというときには言葉で的確に説明することは苦手です。私たち大人は、子どもが、泣いたりぐずぐずしたりしている原因が何なのかわからないことが多いですし、もし、その原因が何かわかったとしてもすべてを取り除くことは難しいです。そういうときに、癒される環境がある、癒されるおもちゃがあるということで、子どもの機嫌がよくなります。機嫌がよければ、たいていのことは何でもできます。

機嫌がよいときは、パンツも履けますし、ご飯も食べることができます。鉄棒もやってみようと思えますし、何でもできるのです。逆に機嫌が悪いと、普段できていたこともできなくなってしまいます。大人も子どももお互いにイライラしてしまいます。つまり、乳幼児にとって機嫌がよいということはとても大事なことです。

7 ごっこ遊びが育むもの

ごっこ遊びは、子どもにとってとても大切なものです。ごっこ遊びが育むものとして[イメージの共有] [想像力] [問題解決力]があります。これらの力を「非認知能力」と言います。この力を育むことができるのが、ごっこ遊びだと思います。

まず、[イメージの共有]についてです。例えば、「レストランごっこをしよう」となったとします。自分が行ったレストランと友達の行ったレストランは、似ているところもあるかもしれませんが、違うところもあるかもしれません。そのとき、自分と他人の体験の違いに気づきます。自分たちの記憶を言葉にして伝え合い、お互いに折り合いをつけて共有を広げていきます。そして「こういうレストランをやろう」と相談しながら決めていきます。これがコミュニケーション能力につながっていきます。

次に、[想像力]についてです。物に対する想像力

と人に対する想像力があります。まず物に対する想像力についてです。何歳くらいからごっこ遊びが始まるかを考えてみました。ごっこ遊びの始まりは、食べる真似、飲む真似だと考えます。1歳未満の子どもでも、おやつ時間に空のコップを出したら「何も入ってない！」と怒り出しますが、遊びの時間に空のコップを差し出したら、飲むしぐさをすると思いませんか。それは、その子が「今は遊びの時間だから真似をする」ということがわかっているのだと思います。それが、その子のごっこ遊びを始めたタイミングだということです。「この空のコップにはジュースが入っているつもり」という想像力のもとにやっています。

次に人に対する想像力についてです。例えば、遊びの中で子どもは、お姫様や赤ちゃん、お母さん、先生になります。これは自分以外の人になる経験です。普段は、苦手な食べ物を残して「もっと食べないと」と言われている子どもが、お母さんの役になったら「ニンジン食べなさいよ」と言うことができるのです。「この人だったらこう言うだろう」と自分ではない人の立場や心になる体験です。これが後に、思いやりのもとになっていきます。

そして、[問題解決力]についてです。難しく考えてしまいがちですが、これは生きる力だと思います。子どもが自分の言葉で伝える、相手とすり合わせていくことです。子どもたちの世界では「最初にこのおもちゃを持っていたのは私だから」と、早い者勝ちが一番多いです。でも、それだけではいつも同じ子どもが使うようになってしまうので「それでは、順番にしよう」「10数えたら替わって」と順番やじゃんけん等、解決の方法を探っていきます。それでも欲しいものがなかなか手に入らないときがあります。そんなとき、小さい子どもは大きな声で泣いたり無理やり取ったりします。でも遊びのトラブルの中で「そんなことではダメだな」ということも学んでいくのです。

ままごとをやるのに「私、赤ちゃん役がやりたい」「私も赤ちゃん役がいい」と言っているのは遊びが成り立ちません。子どもは自分の思いを通してばかりでは、楽しく遊ぶことができないことに気が付いていきます。なぜ我慢して気持ちに折り合いをつけていくかと言えば、それはその子と仲良く遊びたいから、その子が好きだからです。大人はルールで解決しようと思いますが、その源は「友達が大事」という思いがあるからです。子どもが楽しく遊んだり、トラブルを繰り返したりしながら「遊びたいからこうしよう」という思いが気持ちのコントロールの糧になると考えます。大人は子どもに、決まりを守ることの大切さを伝える必要がありますが、それを自分の内側からできるようになるには、遊びの力が大切だと思います。

子どもがごっこ遊びに満足する上で大切なのは、時間と環境です。細切れに隙間を埋めるために与えられた時間では、遊び込むことは難しいと思います。発想を膨らめて、相談しながらごっこ遊びを進めていく時間の確保をしなければいけません。

また、ごっこ遊びは乳幼児期にしかできません。高校生になって「非認知能力が足りないから今からごっこ遊びをしますよ」と言われても取り返しがつきません。子どもがいて、おもちゃがあって、時間があって場所がある。保育を担う皆さんが、このごっこ遊びを大切に考えて、存分に遊ばせてあげることが大切です。今、園の中でやらなかったら、その子どもたちは身につけることができないと思います。

8 心を育む布おもちゃの事例

癒しのおもちゃとしていくつか紹介します。

(1) にぎにぎ

ふわふわして感触のいいものは、触るだけで癒されます。

(2) 赤ちゃん人形・ぬいぐるみ

顔がついている物は、友達になってくれそうで、自分の気持ちに共感してくれるような存在になります。お世話をしてあげたくなり、ぎゅっとしたくなるような存在があることが、情緒の安定につながっていきます。

ソファやクッション、マット、カーペット等ふわふわとした落ち着ける環境も大事です。保育園は、長時間集団で生活します。イライラするとき、友達が次々に帰っていくのを見て寂しいとき、騒がしいところから離れたいときなど、少し気持ちを静めたい、落ち着かせたいときのための場所があるといいでしょう。

(3) ままごと食材

あえて、作りこまないようにして、何にでも見立てられるようにしてあります。丸っこいもの、平らなもの、つるつるしたものというふうに作っています。

(4) 変身グッズ (エプロン・スカート・マント)

ひらひら、ふわふわ、きらきらした物があると、遊びが盛り上がります。

(5) 布スティック

手指の訓練と思わずに、子どもの想像力に任せてごっこ遊びにどんどん取り入れてほしいと思います。

おわりに

園に行かせてもらい、作りたいおもちゃを作るといふ研修も承ります。

第8回 焼津市保育者資質向上研修会
令和2年2月25日(火)
会場：焼津公民館 大会議室